

やわら 柔の道

1

■話の肖像画■

北京五輪の開幕が近づいてきました。柔道は昨年の世界選手権（ブラジル・リオデジャネイロ）の結果などから厳しい戦いが予想されていますね。山下 前回のアテネ五輪（2004年）で日本は世界がびっくりするぐらい勝ちました（男女合わせて金8個）。世界は震え上がり、「どうしたら日本に勝つことができるか」を考えたのです。そこで出てきたのが、

やましたやすひろ

東海大教授 山下泰裕さん



（大山実撮影）

日本に「柔道をさせない」戦略。持たせない、組ませない……。まあ非常に面白くない柔道なんですけれど、アテネの翌年（05年）の世界選手権以降、日本の成績がずっと悪いのも事実です。昨年の世界選手権は最低の結果（五輪種目で金1）に終わり、非常に厳しい状況が続いていると思いますね。

不振の原因として、「返し技」への対策が十分でなかったという指摘があります

山下 世界の流れは、「どっちが投げたか」よりも、「最後に投げた技を取ろう」になっています。こちらは完璧に投げたと思っただけ、最終的に相手に返されてしまったら、その技の方を取ろうということですね。昨年の世界選手権では鈴木桂治

いつきてもおかしくない「金ゼロの日」

変わったわけではありませんが、「世界の傾向」を見逃してしまつたところはあるでしょう。せめてもの救いは、「これが五輪でなくてよかった」ということです。

日本のお家芸・柔道も、五輪の金メダル「ゼロの日」がくるかもしれません

山下 私が日本代表の監督をしていたときから、その「Xデー」が、「いつきてもおかしくない」と思っていました。今や柔道は世界199の国・地域（国際柔道連盟に加盟）で行われており、力は拮抗しています。柔道は「日本で生まれたから、日本が勝つのは当たり前」という視点で見ると、なかなか難しくなっているでしょうね。

（喜多由浩）

選手らが、そうした「返し技」を取られて負けてしまいました。

■昭和32（1957）年、熊本県生まれ。東海大学大学院体育学研究科修了。全日本選手権9連覇、ロス五輪無差別級金メダル、203連勝の偉業を達成し、60年現役引退。アトランタ、シドニー五輪の日本代表監督、国際柔道連盟教育コーチング理事を歴任。現在、東海大体育学部教授、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、神奈川県体協会長。59年に国民栄誉賞受賞。著書に「武士道とともに生きる」（奥田碩氏との共著）などがある。

■ 話の肖像画 ■

やわら 柔の道

2

過去の五輪では外国人審判の判定について議論を呼んだことがあります。その技量をどうみていますか

山下 外国人審判のレベルは年々向上していますよ。国際試合ではライセンス制がはつきりして、世界選手権に出る審判をまず選び、その中から五輪



東海大教授 やましたやすひろ 山下泰裕さん

■昭和32（1957）年、熊本県生まれ。ロス五輪柔道無差別級金メダル、国民栄誉賞受賞。

本人審判だから優秀だとか、外国人だから技量が劣っているとかはいえませんが。大事なものはどんな状況でも、どんな審判が出てきても、勝てる試合をしないといけないことです。

日本は「スポーツの国際政治」の分野で、どうも発言力が弱い。そのため、勝手なルール変更が行われても文句も言えない、という指摘がありますね。山下さんが昨年9月、国際柔道連盟の理事選で落選したときは日本中が大きなショックを受けました

山下 あのとときの理事選にはいろんな背景があって、私の落選は事前に予想されていました。だから私自身はさばさばしていたのですが、日本に連絡を取ると、まるで（東京五輪で）神永（昭夫）先生がヘーシンクに負けたときのような衝撃が広がっていると聞いて、びっくりしました。

ただ、（柔道に限らず）日本人の理事がいないと、ルール変更などの情報が入ってくるのが遅れたり、結果的に不利になることがありますから、競技の発展を願うなら、国際的な組織で活躍できる人材の育成は重要だと思いますね。

これまではそうした努力が足りなかった？

山下 足りなかったと思います。これからは、語学の問題を含めて、当然やっていかねばならない問題でしょう。私も今後はそうした人材を育成する側に回ります。（喜多由浩）

日本のメディアでは「誤審に負けた」という論調になることも多いですね

山下 反省しなくちゃならないのは、テレビ中継に出ている柔道出身の解説者たちが、日本びいきのあまりに、そうしたことを口にするんです。そのため、外国人審判の技量がひどく低いような印象を与えてしま。でも実際には、一概に、日

国際的に通用する人材育成を

■ 話の肖像画 ■

やわら 柔の道

3

1984年のロス五輪柔道無差別級決勝戦。それまで「勝ち負け」にこだわってきた山下さんが、このとき初めて「無」の状態（試合に臨むことができた）でですね。

山下（2回戦だけがをし）正直、どうやったら勝てるのか、分からなかったのです。

ロス五輪。ラシュワンとの決勝戦



やましたやすひろ
東海大教授 山下泰裕さん

■昭和32（1957）年、熊本県生まれ。ロス五輪柔道無差別級金メダル、国民栄誉賞受賞。

山下 決勝戦は本当に「紙一重」の差で勝つことができませんでした。でも、もし負けていたら、どうなっていただろう？と考えると怖くなったのです。みんなが騒げば、騒ぐほど、そうした考えに取りつかれました。私はそんなことを考えてしまう人間なんです。だから一瞬たりとも気を抜いてはいけません。常に最善を尽くさねばならないんだ、と改めて思いました。

さすがですね。国民栄誉賞を受賞し、「世界の山下」「日本スポーツ界の顔」と騒がれる。重荷に感じることがありませんか

山下 自分ではそんなこと思っていないから（苦笑）。重荷に感じることもありませんよ。私は、誰と会っても同じ自分でありたい、自分に正直に生きたいと思います。そして何かを判断するときは、国民栄誉賞や金メダルとは関係なく、一人の男として、柔道家として、そして日本人としての判断を基準にしているつもりです。

私には欲望もあるし、立派な人間でもありません。それでいいじゃないですか。「聖人君子」では生きられませんよ。その上で、少しずつでも成長していきたい。最期には笑って逝きたい。できれば上（天国）に上がりたい。私の最終目標は「自分が幸せになること」なんです（苦笑）。そのためには、周りの人が幸せになれるよう、汗をかかねばならないでしょう？

（喜多由浩）

「無」の状態に臨めたロス五輪

戦い方が見えなかったから、作戦を考える余裕なんてありません。心を「無」にするしかなかったのです。決勝戦は、あの状態で最善を尽くすことができた、と思っています。

そして獲得した金メダル。世界中に感動を呼びました。山下 それは、けがをしたからでしょうね。もし、そうでなかったら、私の優勝なんて1年後にはみんな忘れていきますよ（笑い）。何が幸いするか、分からないものです。でもあのとき、日本に帰って、熱狂ぶりを見ながら、実は怖くて震えていたのです。

怖くて？

■話の肖像画■

やわら 柔の道

4

2016年東京五輪の招致大使に任命されました。オリンピックの「効用」についてどう考えますか

山下 私が小学校1年のとき、東京五輪（昭和39年）での日本選手の活躍に夢中になり、中学2年生のときには、将来の夢として、「オリンピックに出て、メーンボールに昇る日の丸を見て君が代が聞きたい」と作

2016年東京五輪招致大使発表会で



文に書きました。小学生の私を感じた夢や感動を、今の子供たちにも味わわせたい。スポーツ人としては、地元で開催すること、もう一回、「強い、たくましい、美しい」日本の成績が生まれてくるのではないかと、という期待もあります。

4年に1度の五輪は選手にとってそれだけ素晴らしい舞台だということですね

山下 確かに見る方は、4年に1度かもしれません、多くの選手にとって、そのときにピークをもっていくという意味では「一生に一度」のチャンスな

「東京五輪」で子供に夢を

やましたやすひろ
東海大教授 山下泰裕さん

■昭和32（1957）年、熊本県生まれ。ロス五輪柔道無差別級金メダル、国民栄誉賞受賞。

のです。私も結果的には1度の機会しかありませんでした（日本がボイコットしたモスクワ五輪は幻の代表）。ロス五輪のときには選手としてのピークは過ぎていましたね。

五輪開催は世界の人々に「日本の良さ」を知ってもらうチャンスである、とも：

山下 世界を見渡せば、日本はまだまだ、遠く、緑の薄い国だという人たちが少なくありません。アフリカや南アメリカ、特に一般市民の認識はそうでしょう。五輪を開催すれば、世界中からたくさんの人たちが日本にやってくる。そして「日本の良さ」を知ってもらうことができると思います。

もうひとつ、私が心配しているのは今の日本の若者たちがだんだんと「内向き」になってきていることです。全体として安易な方向に行きがちで、新しいことに挑戦しない、未知の世界に飛び込まない。大きな志を描かない。外国の知らないところへ飛び込んでいくよりも、仲間同士でいるのが心地良い。そういう空気が出てきている感じがするのです。

五輪には若者の意識を変えられる力がある？

山下 日本は資源もないし、「世界の中の日本」として生きていくほかない。日本人はもっと外に出て世界を見る必要があるのです。五輪を通して世界に関心を持つ。そういう意味では格好のイベントですよ。

（喜多由浩）

■話の肖像画■

やわら 柔の道

5

— 今の日本、殺伐とした事件が相次ぎ、若者たちもおかしくなってきたといういます
山下 確かにそうですが、問題は「誰がおかしくしているのか？」でしょう。それは親であり、大人ですよ。われわれが自身の生き方、価値観を見つめ直し、自分に恥じない行動をしなければならぬ。世の中の「あり方」が子供に反映されると思



やましたやすひろ
東海大教授 山下泰裕さん

うからです。
— その通りですね
山下 かつての日本人が持っていた美徳。潔さ、清さ、敗者への思いやり、和の心、といったものをもう一度、見直してゆく必要があるのではないかと、と思っています。スポーツの世界で一番大事なのはフェアプレーの精神であり、スポーツマンシップです。柔道になぜ「道」がついているのか？ それは日常生活に精神を生かすためです。どんなに強くても日常生活に生かせないのは「柔の道」ではあ

「日本の心」取り戻そう

■昭和32（1957）年、熊本県生まれ。ロス五輪柔道無差別級金メダル、国民栄誉賞受賞。

りません。「日常生活でのフェアプレー」を大事にする、という運動が広がっていったら、世の中の価値観にも何らかのインパクトを与えられるかもしれません。

— 柔道を通じた人間づくり「柔道ルネサンス」の活動に取り組んでいますね

山下 これは新しいことではなく、柔道の創設者である嘉納治五郎師範の精神です。その原点にもう一度、戻りたい。「最強」の選手ではなく、「最高」の選手を育てたい。日本人が何千年も大事にしてきたものを、柔道という切り口で少しでも取り戻したいのです。

— 国際交流にも？

山下 2006年に（柔道が好きで）ロシアのプーチン大統領（当時）が来日したとき、嘉納師範の書（「自他共栄」）を贈りました。その言葉は、相手がいるから自分がある。一番大事なのは相手への尊敬だという意味です。プーチン大統領は「国民の教育のために使いたい」と喜んでくれました。

また、中国でのサッカーの試合で日本女子チームがブーイングを受けたのに試合後、「ありがとう」の横断幕を掲げたことがありました。あれが日本の心です。中国人の中にはこんな態度でよかったのだろうか？ と思った人もいたでしょう。スポーツを通して「日本の心」を発信する。それは決して無駄なことではないと思いますね。 〓おわり

（喜多由浩）